大道芸通信

編集発行/日本大道芸・大道芸の会 光田 憲雄　(daidogei@kib.biglobe.ne.jp) http:// daidougei.seesaa.net

おいね女

京都に住む人なら「おいね女」といわれて、すぐにピンとくるかも知れない。しかし他国人である私は聞いたことがない。ネットを駆使して調べてみたら、姉さん女房を指す三重言葉「おいね」の音が一番近い近いようであったが、意味が少々違うようである。『風俗画報』第五十七号に霞蝶園主人が載せるのは、「小(大)原目」や「白川女」の類みたいである。原文のままを紹介するので、もう少し詳しいことをご存じの方があれば、是非教えて欲しい。

此おいね女は何年頃より井出しかは知らざれど、明治五年までは大津街道より都に通へるは見たり。此女は春に其の物産を追ひて運べる者にて、世人俗に呼びて(おいねおいね)と号せり。身には麻の紺糸にて幾重にも綴りたる着物に脚絆草鞋にて図せる如きを背にあてて、大津舟橋より白米一俵宛を背追て都の町の米尚に来るを以て、業とせる女にして、大体其の賃四百文位なり。是と同じきは鞍馬の里(鞍馬山辺)にもあり

浅草浅草寺の仁王孫の股くぐり

是も府下にて有名なる金龍山浅草寺の仁王門に安置せる仁王尊像のことにして、いつの頃より始まりしか且つ起因も詳らかならざれど、小児をして右の肩にたてる仁王尊の股間をくぐらすれば、疱瘡等にかかりても軽症に終わるとて、信仰するもの夥し。此のことは文化十一年板の神仏願懸重宝記に精しければ左に抄出す。

金龍山浅草寺の仁王尊。右のかたの一躰を排し。いまだ疱瘡せざる小児を此ところへ連れ行き此の股ぐらをくぐらすれば。疱瘡はいつしかいたって軽しとて遠近より聞き伝へ此処に来たる平常は錠を下ろして内へ入ることを禁ずれども、毎月八日御縁日には人を入るなり。猶此あたりなる茶みせに到り訪ね問ふべし。

とあれど今はさることなし。されど尚ほ他所にあるに王尊へ此の願懸を為すもの少なからず。また仁王尊へ疱瘡の祈願懸をなすことの盛んなるは田端のに王孫を最とす。こは後章に精しく記すこととせむ。

(註)府下の「府」＝一九四三年に「都」に変更されるまでは、東京も「府。」

股くぐりの図
（『風俗画報』）

処で、今の浅草寺に股くぐり出来そうな仁王門はない。しかし検索すると、山門である宝蔵門が、仁王門であった。それじゃ、何故宝蔵門というようになったかというと、これも由来がある。一九四九年(昭和二十)の空襲で、本堂(観音堂)以下、五重塔や経蔵等と共に仁王門も焼失してしまった。

これが再建されたのは、本堂が一九三八年(昭和三十三)、雷門が一九六〇年(昭和三十五)、宝蔵門が一九六四年(昭和三十九)であった。

再建にあたり、仁王門から宝蔵門へ改名したのは、経典を収納する経蔵や伝来の寺宝を収容する宝蔵も兼ねた門として建造されたからである。

宝蔵門に収蔵された経典は、「元版一切経(国の重要文化財)」である。元々鎌倉の鶴岡八幡が所蔵していたものである。同八幡が、明治の神仏分離令の際、神社として生きることを選んだため、寺院であった頃の面影を偲ばせるとして撤去された山門(仁王門)や護摩堂、多宝塔などは撤去。一切経は 廃棄焼却処分されそうになったところを、浅草寺に帰依していた尼僧の貞運尼が買い取り、浅草寺へ奉納したという。